

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

石の心

彌兵衛自らが剣山に第一の鑿を入れ、大槌を振るったが岩盤は硬く、まるで岩は、彌兵衛の鑿を拒むように撥ね返した。必死に打ち込めば打ち込むほど、硬い岩は鑿を撥ね返し、力の入った彌兵衛の体は、あやうく投げ出されそうになった。

そんな時、石工の一人が彌兵衛の側に立った。「庄屋の旦那、その手付や腰付じゃあ、岩と勝負は出来ませんぜ。旦那は、まだ石の心が解っておりなさらん。怪我が有ってはなりません。わしらに任せてござんさい」

石工の言葉は無愛想だった。

「石の心、とな？」

彌兵衛は問うたが、石工は答えなかった。石工は岩肌を手で丁寧撫でると、岩の上で小さな木の枝や枯れ葉等を集め焚火をして岩肌を温めた。そして、岩に小さな穴をいくつか根気強く開けた。岩は温められたことで少し脆くなるのだ。そして、鑿を当て、大槌を振り上げた。先程まで、ピクリともしなかった岩が嘘のように土煙を上げて落ちて行った。

石工は呟くように言った。

「毎日、毎日、石と向かい合って四十年にもなります。小僧のころから石工の親方の所で石とばかり話をして、今頃になって、やっと少しばかり石の心が見えて来るようになりました。親方が常々、言っておりました。木には木の心、水には水の心、石には石の心が有る。それが見えんようでは、良い仕事は出来ん……と」

「ふむ……」

彌兵衛は発する言葉を失った。



画 寺戸良信

「自然に学べ……と言うのが親方の口癖で。人間は上から高い目線で物を見てはいかん。謙虚に自然から教われ、と。よく聞かされましたなあ。庄屋の旦那さんも、今に岩と話が出来るようになります。そしたら、岩の心が自然に解ってきます。焦ることは有りませんぜ」

石工は、彌兵衛の存在など、まるで気にならない様子で、黙々と仕事を続けた。

彌兵衛、五十六歳の春、もう一つの人生が始まろうとしていた。

意宇川の工事は順調に進みつつ有ったが、その分、周藤家の米蔵からは米が消え、道具蔵の品は次々と工事費へと化けた。

夫、彌兵衛には工事以外の心配を掛けないようにと、妻のクニの遣り繰りは大変なものだった。細身のクニの体は、益々細くなっていった。年老いた姑や娘や息子に苦しい財政を気づかれないようにと、クニは心配りも忘れなかった。けれども、姑のサトにも、娘のゆうにも当然のように重荷がのし掛かっていた。

工事関係者の出入りは日を追って激しくなり、客の接待や食事の仕度等、クニ一人では到底賄いきれなくなった。クニに台所を委ねてからは、久しく台所に立つことがなかった姑のサトが、はりきって食事の仕度を引き受けることも多くなっていた。